朝日選書
346

続百代の過客 上

日記にみる日本人

ドナルド・キーン著

金関寿夫訳

ドナルド・キーン著

金関寿夫訳

続 百代の過客 上

日記にみる日本人

朝日選書 346

ドナルド・キーン (Donald Keene)
1922年ニューヨーク生まれ。コロンビア大学仏文科卒。在学中から日本語を学び，戦後ケンブリッジ大学，京都大学などで日本文学を研究。日本文学を多数海外に紹介，1962年に菊池寛賞，1983年に山片蟠桃賞，国際交流基金賞受賞。現在コロンビア大学教授，朝日新聞社客員編集委員。著書『日本文学史・近世篇』『日本文学史・近代現代篇』『日本文学散歩』『日本人の質問』など。『百代の過客』で読売文学賞，日本文学大賞を受賞。『人間失格』など英訳も多数。

金関寿夫（かなせき・ひさお）
1918年松江市生まれ。同志社大学英文科卒。都立大教授等を経て，現在駒沢大学教授。専攻アメリカ文学。著書『アメリカ・インディアンの詩』『ナヴァホの砂絵』『アメリカ現代詩ノート』など。訳書G・スタイン『アリス・B・トクラスの自伝』，D・キーン『百代の過客』ほか。

続 百代の過客 日記にみる日本人（上） 朝日選書 346

1988年1月20日 第1刷発行 定価1100円

著者 ドナルド・キーン
訳者 金関寿夫
発行者 八尋舜右
印刷所 共同印刷
製本所 和田製本
発行所 朝日新聞社
〒104-11 東京都中央区築地5-3-2 電話03(545)0131(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京0-1730

©D. Keene 1988 Printed in Japan
装幀・多田進
ISBN4-02-259446-2

本文中に引用した日記等の表記について

・仮名づかいは原文のままとし、句読点をおぎない、濁点とルビを加えた。

・原文中のルビは（　）付きのルビとした。

・原文中の（　）は〈　〉とした。

・注釈、誤字の訂正、欠字の補完は（　）に入れて加えた。

目次

近代 I

序　近代日本人の日記　3

1

遣米使日記　18
奉使米利堅紀行　43
西航記　56
尾蠅欧行漫録　69
欧行日記　82

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

仏英行　90
航西日記（渋沢栄一）　94
米欧回覧実記　109
航西日乗　137

2

桟雲峡雨日記　164
松浦武四郎北方日誌　181
南島探験　205

3

航西日記（森鷗外）　230
独逸日記　237
漱石日記　262

新島襄日記　277

4

木戸孝允日記　304

植木枝盛日記　310

装画　牧　進

続 百代の過客

日記にみる日本人 上

朝日新聞に同名で連載。上巻には、一九八六年十月十三日から一九八七年四月十六日までの掲載分を収録。

序　近代日本人の日記

近代の日記を読む

私は『百代の過客』を五年前に書き始めたが、当初の計画では、九世紀の僧円仁(えんにん)による漢文日記に始まり、私が個人的に見知っていた作家たちのものも含む、ごく最近の日記に至るまで、日本の日記を全体的に取り扱うつもりであった。ところが私の原稿は、知らぬ間に途方もなく長いものになってしまい、したがって初めの計画は、やむなく断念せざるをえなくなった。『百代の過客』で取り扱った最後の日記は、嘉永七年（一八五四）ロシア艦隊が、下田に寄港したことについて記述している。

円仁の日記と、川路聖謨(かわじとしあきら)のそれとでは、その内容、表現のどちらにおいても、いちじるしいちがいが見られるのは当然である。なにしろ二人の間には、千年という歳月の隔たりがあった。またある時代に盛んに用いられた日記の種類が、後世になると、すっかり姿を消すことも少なくない。例えば、宮廷の女性によって書かれた女房日記は、平安朝文学を顕著に特色づけていたが、鎌倉時代

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の末期、『竹むきが記』をもって、この伝統は終わっている。以後五百年間、女房はおろか、そもそも女性によって書かれた日記自体が、まったく現れなかったのである。室町時代には、僧侶による日記が盛んであった。しかしこれは、徳川期になると重要性をかなり失い、それ以後は完全に姿を消してしまう。

私が取り扱った日記は、文学的興味の点からみても、さまざまなちがいがあった。そもそもの初めから、私は普通〝文学〟として扱われている日記だけに、私の選択を限定しないように決めていた。とくに現代の読者に訴えるなにものかがあると思えたなら、どんな日記でも、躊躇せずに取り上げることにした。もちろんどのような日記にも、歴史家や文化人類学者が喜ぶ材料が、少なくともわずかばかりは、かならず含まれている。しかし私が訴えたいと望んだ相手は、いわゆる一般読者であって、過去の日本を研究する専門家では、決してなかったのである。

私が取り上げた日記の中で、私の関心を最も惹いたものは、日記作者その人の声にほかならなかった。私はいつも、なにか心からの声に、耳を傾けようと努めた。表現された感情のいかんにかかわらず、単に熟達した文体ではなく、なにかはっきりと、個性的な音色のようなものを聞こうとした。私はまた、文学史家が誰一人注目することのない日記の中にさえ、それを読む今日の読者が、何百年も昔に生きたその作者に突然一種の親近感を抱くような、なにか感動的な瞬間がないかと探し求めた。

過去の人間は、私たちにとってまったくの異邦人だ、と主張する作家は、昔から少なくなかった。

例えば『サランボー』におけるフローベール、『日輪』における横光利一など。彼らは、私たちを、私たちの祖先から引き離している、むしろ隔たりのほうに、もっと強調をおいている。だが私たちが日本の古い日記を読んでいると、それらの作者が、私たちに実に近い存在のように思えて、驚かされることが少なくない。『蜻蛉日記』の作者を、人間的に好きになるのは、無理かもしれない。しかし彼女を理解することは、なんなく出来るのである。そして私たちとても、表にこそ出さないけれど、彼女と同じくらい利己的な考えを抱いたことがあるのを、ひそかに認めざるを得ないはずである。彼女はまた、誰か私たちの知人の中にいても、少しもおかしくない人物とさえ思われる。したがって私は、『徒然草』に出てくる兼好法師の、次の言葉をここでどうしても思い出すのである。

昔物語を聞きても、この比の人の家の、そこほどにてぞありけんと覚え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覚ゆるにや。

大昔の人々が書いたものの中に現代性を発見すること、そこに描かれた人々と、私たちが身近に知る人々との間に、なんらかの類似点を見出すこと、これらは古い日記を読むことによって受ける喜びの一つなのだ。しかしこのことは、かならずしも近代以後に書かれた日記を読む際には通用しない。私たちは、ことさら私たちとの類似性を探す必要はない。作者自身が私たちに似ているだけではなく、あまりに近すぎて、手を伸ばせば、ほとんどさわれるくらいだからである。だから私たちは、さきほどから述べているのとはまたちがう理由で、彼らの日記を読むのである。

大事件を体験した普通の人びと

今度新しく近代の日記を選ぶにあたって、私は二つの点で、自ら制限を受けざるを得なかった。すなわち、入手可能な日記と、私が読むことの出来る範囲の日記、この二つである。というのも過去一世紀の間、あまりにも多くの日記が書き続けられてきたからである。そしてその中のいくらかは、少なくとも私家版として出版されたが、その他にも数多くの日記が、誰にもかえりみられぬまま、おそらくどこかの記録保管所や、古い柳行李（やなぎごうり）の中に眠っているにちがいない。そしてこれら知られざる日記の多くには、作者の一族以外の者の関心をそそるような材料が含まれているとは思えない。それに日本人の日記に付きものの記述——例えば百年前の某月某日の天候——などは、一族の者でも、読めばうんざりさせられるのではなかろうか。昔の日記を読んでも、知らされるのは、すでに意味を失くしてしまった事柄だけ、というのではがっかりである。それはまるで、百歳の人間に会うようなものではないか。

その人がそれほど長く生きながらえたという事実は、なるほど特筆すべきことかもしれない。ところがそうした人物が、私たちの興味をそそるような話をしてくれることは、まずありえない。彼は、私たちが聞いたこともない人たちが病気したとか、死んだとかは記憶しているだろう。またなにか世の中が変わるような、革命的な大事変が起こった際に、たまたまその場に居合わせたとしても、それについて彼が憶えていることは、せいぜい砂糖や卵を買うのにいかに難儀をしたか、とい

うことくらいなのである。

日記というものは、読んでしばしばがっかりさせられるものである。さる英国大使館付の外交官だった人の妻が四、五十年前に書いた日記を読んだことがあるが、例えばある晩、ジョージ・バーナード・ショウが、夕食の客としてやって来たことを、彼女は書いている。ところが彼女は、こちらが一番ききたいところ、すなわちショウがその晩、なにについて語ったか、いや、自分がショウに対してどんな印象を持ったか、ということさえ言わないで、その代わり、もっぱらその晩出した料理の品数、内容のことだけを記している。

そう言えば、百年前の日記作者が富士山の美しさを描いてくれていても、それほど私たちの興味をそそることはないだろう。もっとも文体が格別に見事な場合は、話は別である。だがもし日記作者の言っていることが、富士山の山容はすこぶる美しい、ということだけならば、富士の姿は今も昔も同じ、という点だけから言っても、今日の料理店、出版社の編集室や警察署の内部の描写のほうが、それよりもまだ面白いはずである。

ところが日記を書く人間が、料理店のことを普通わざわざ書こうとしないのは、料理店のことなぞ、誰でも知っているし、料理店は永久に様がわりすることはない、と勝手に決め込んでいるからにほかならない。今日、日記を付けている人たちで、東京の地下鉄駅構内をことこまかく描写する人はおそらくいないだろう。しかしそのような情報こそ、今から百年後の学者が、吉野の桜を愛(ほ)め上げた記述にも増して、望むところのものなのだ。

いちじるしく劇的な状況の中で書かれた日記は、かりに書いた当人にさしたる文才がなくとも、その状況自体の異常さゆえに、たいていの場合読んで興味深い。関東大震災、あるいは昭和二十年（一九四五）における空襲時の個人的な体験を、正直に綴った無名人の日記のほうが、何事もなかった年における高名な小説家の日記よりも、ずっと面白いだろう。例えば戦時中、日本の兵士が付けていた日記には、時として耐えがたいほどの感動を誘うものがある。

私はこの『百代の過客』続篇執筆に当たって、有名な文人の日記だけに限ることなく、できれば日本の国民全体に襲いかかった種々の大事件を体験した、普通の日本人による日記も考察してみたいと思っている。

日記のなかのフィクション

近代の日記には、同じような状況下に書かれたものが、いくつかグループをなしてかたまる傾向がある。例えば、幕末期、様々な日本人によって試みられた欧米諸国への渡航は、日記を付けた人間の個性には大差があっても、内容においては互いに似通っている点が多い。いくつかの日記には、例えば『航西日記』といった、まったく同じ題名さえ付いている。他にも日清戦争から太平洋戦争に至るまで、日本が関与した戦争を基軸に書かれた一群の日記がある。また北海道入植、室町時代以来初の日本人による中国訪問、議会民主主義政治の開始など、いろいろな新事件の周辺にも、それぞれいくつかの日記がかたまっている。

平安時代（いや、それよりもっと後でもよい）の日記について語る場合、日記の記述は、そこに描かれている事件が実際に起こった日よりも、普通、はるか後に書かれたという事実を、認めておく必要がある。つまり、それらの記述は、本当に起こったことの忠実な描写としては、かならずしも受け入れられないということである。けれどもかりに記述された事実が、時の経過が引き起こす思いちがいによって歪められてはいても、それは普通、さほど問題にするには当たらない。つまりそのような日記の文学的価値は、つまらぬことは忘れ去られて、本当に大事な事柄だけが作者の記憶に残っていることによって、かえって高められるかもしれないからである。けれども近代の日記の場合、通常、記述は、そこに記せられた日付どおりの日になされている。したがってそれは、古い日記の場合よりも、もっと真実に近い可能性がある。この事実は、作品の文学的興味を、あるいは減少させるかもしれない。というのは、日記作者にとって、この事件は重要だが、あの事件は入れる必要はない、といった判断を下すための時間が、まだ十分経っていないからである。しかし平安時代に存在したような日記は、今も形を変えて残っている。すなわち回想録、あるいは自伝という部類である。

とはいえ、いわゆる本当の日記にも、作り事（フィクション）が含まれていないとは限らない。とくに出版を予想する場合など、書き手はいつでも、一つの記述事項を変更したり、あるいはあとから新しい材料をつけ足したりすることが出来るからである。例えばさる文壇権威筋は、本の形になった永井荷風の日記は、彼が戦時中、日々実際に書き記したものとは違うのではないか、と言っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com